

学長室だより

2019.09.24 NO.19

秋田でユニークな会社

「人口減」や産業の退潮を、何とかして挽回（ばんかい）しなければならないとの思いを、秋田の全県民が持っている。しかし、危機意識だけにとどまっていたら、何も変わらない。つまるところ、この状況を粘り強く逆転させていく人材群の輩出が欠かせない。その人材は、自分の道を切り開きながら、業を起し、結果として県の活性化に貢献していかなければならないだろう。

本学もその基本目標を、異文化とまざり合うグローバル化社会で活躍する「秋田発」の人材を輩出することに置いているが、卒業後も地元秋田に残ってユニークで将来性のある企業の設立を目指す若者が出てきた。

6期生の須崎裕さん（34）もその一人。在学中の2014年に旅行企画会社・トラベルデザイン社を立ち上げた。留学中の見聞をもとに、秋田に新しい視点からの観光地域を創り出すという試みだ。観光の在り方を根底から覆すビジネスモデルで、外国人観光客に向けた田舎体験など、通常では経験できないツアーを企画している。

羽後町と共同でタイや台湾の人たち向けに語学留学ツアー「羽後町留学」を開発。西馬音内（にしもない）盆踊りの研修や農家民宿を通じて日本語上達を図るという。

秋田で時間をかけて自分の足で風景や歴史、文化を実際にみてみたいという自転車愛好家を対象に、男鹿市で、レンタサイクルの貸し出しを担当しているのは10期生で地域おこし協力隊の大橋修吾さん（25）だ。坂道も多い男鹿半島で、乗用車ではなく、自転車でのツーリングに目をつけた。男鹿には近年、海外からの観光客も増えているが、大橋さんは市と観光客の架け橋になれていると自負する。

男鹿市観光協会は、電動アシスト付きスポーツ自転車やロードバイクを用意し、様々なニーズにこたえる「サイクリストのための男鹿」をつくっている。

プロバスケットボールの秋田ノーザンハピネッツの創始者で1期生の水野勇氣社長（36）は豪州の大学に留学中にスポーツ・マネジメントを学んだ。そこで確かな手ごたえを感じ、帰国後に昔からの夢を実現させようと奔走。志を支援するほかの経営者たちの協力も得た。今回はスポンサー不足を自分たちでカバーしようとオリジナルクラフトビールの販売を打ち出した。

秋田の市町村には、地元観光や産業振興のために「地域おこし協力隊」を結成しているところが出てきているが、そうした事業にこそ、若者たちの斬新なアイデアが必要だ。

グローバル水準の視座を身に付けたうえで、秋田という地方で、地に足を付けた起業を行っていることは日本の将来に対して、一つの進むべき方向を示していると思う。私は大学界の様々な会議に出席しているが、「本学の取り組みを参考にしたい」という声を耳にするたびに、学生たちのことを誇りに思うと同時に、感謝している。

注) 朝日新聞秋田版「あきたを語ろう」からの転載です。以下 URL からご覧いただけます。
<http://www.asahi.com/area/akita/articles/MTW20190924051550001.html>



鈴木 典比古

President Norihiko Suzuki, DBA